

希望を耕す

# 民主化する建築

東京大学教授・建築学  
**松村秀一**  
Shuichi Matsumura

## 素直な民主化

新しい本を書き上げた。事が順調に運ばば、この本誌がお手元に届く頃には上梓されているかもしれないが、さていかがなものだろうか。仮のものだが私の希望するタイトルは「民主化する建築」。「民主化」というキーワードに沿って、近代以降の建築の状況を振り返り、今の日本の新しい建築界の景色を語ろうとしたものだ。

リノベーションについてのあるシンポジウムで、大阪のリノベーションを先導してきた中谷ノボルさんの「今起こっていることを一言で言えば『民主化』やと思いますわ」という発言に得心して以来、気に入って使っている。簡単に言えば、人々が、自分の暮らす環境、働く環境、遊ぶ環境を自ら主体的に考え、自由に組立て始めたことを指して、中谷さんは「民主化」と言ったのだ。政治的な闘争などとは全く無縁に、若い人たちがSNS等を通じて知識や経験を広く交換・共有し、ネット上の市場で調達・売買を行うことで、自らの環境を自らの意志で創り出すようになりつつある現代の状況は、まさに「民主化」と呼ぶに相応しいものだし、何ら闘争らしきものがないだけに「素直な民主化」と呼

んでも良いだろう。  
二〇〇万以上のレシピが集合知を形成するCookpad、一般の個人の暮らしのノウハウが一躍世界のベストセラーになった近藤麻理恵さんの片付け本、建築工事関連グッズの一物一価を実現したネットストアMonotaRO等々。これらが象徴する人々の新たな活動の様態。それが「素直さ」の背景にはある。

## 三つの世代

さて「民主化する建築」である。近代以降の建築は一貫して民主化を目指してきたと考えられる。今日の素直な民主化は第三世代、その前に二つの世代があったというのが私の理解である。

第一世代は、民主主義の時代に相応しく人々の生活基盤を整えるべく、近代的な建築をいわばトップダウンで普及させた世代。健康で近代的な生活をおくれるような住宅を多くの人に届けようとしたハウジング、近代社会の諸制度に対応するべく各地に建てられた学校、病院、図書館、美術館、コンサートホール、工場、オフィスビル。それらは第一世代の象徴だ。

第二世代は、第一世代のトップダウン路線に飽き足らず、その背景にある政治体制、行き過

ぎた効率主義等への反感とも相まって、「個」の主体性を獲得しようとした世代。一九六〇年代後半以降活発になった世代だ。この世代に現れたいくつかの方法論には、今日の第三世代の民主化において再評価されるべきものが多くある。本格的な説明は単行本の方に譲るとして、ここでは二つだけ挙げておこう。

## ホール・アース・カタログと パタン・ランゲージ

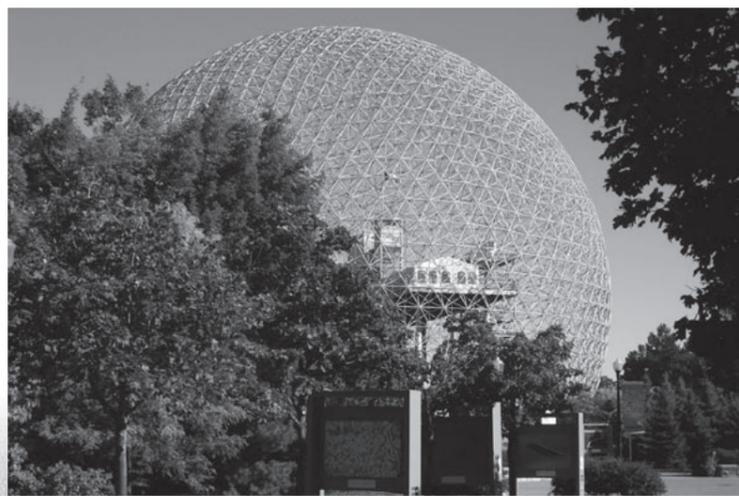
一つは「ホール・アース・カタログ」。今では、ステイブ・ジョブズが大きな影響を受けたことで再注目されているが、一九六八年にスチュアート・ブランドらが発刊したこの雑誌は、それまで多くの人の目に触れなかった地球の写真を表紙にしたことが象徴しているように、宇宙船地球号の上で人間が主体的に生きていくために活用し得る科学や技術や仕組みなどを、網羅的に収集・紹介したもので、冒頭をバックミンスター・フラウの思想や発明が飾っている。ここに紹介されたフラウ・ドームの原理は、その後合板を使ったヒッピーたちのDIYシェルターに広く適用されることになった。ブランド達

の狙い通り、お仕着せではない自分自身の住まいや仕事場を作るツールとして活用されたのである。

今一つはクリストファー・アレグザンダーの「パタン・ランゲージ」。原書は一九七七年、邦訳は一九八四年に出版された。人びとが心地良く感じる環境のあり方やその構築法等を「パタン」として集め、それを組合せて全体環境を形成していくという革新的な方法、しかも生活者が主体的に参加できる方法を提示したものが、今では建築界ではなく、むしろシステム開発等の分野で有効な方法として活用され、情報系の世界では「アレグザンダーはレジェンドです」という人もいる。

「パタン・ランゲージ」の革新性は、建築家と称する人々が自らの奥義と関係付けて何やら専門的に語ることの多かった「空間」とその実践法を、一般の人々に対して開こうとする点にあり、実際日本でもまちづくりや場創りに活かされている例もある。

これらが明示或は示唆していた方法論は、今日本で始まっている第三世代の民主化において大きな力になると私は考えている。



これはDIYではないが、最も有名なフラードームの一つ。1967年モントリオール万博でフラウの設計により建設されたアメリカ館。当初はアクリルで覆われており「バックキの泡」と呼ばれた。